【論　文】

持続の複数性について

齋藤 暢人

0. はじめに

『持続と同時性』においてベルクソンはアインシュタインの相対性理論をふまえつつ自らの時間論を展開した。しかしながら、その所説は物理学者からの批判を招くこととなり、ベルクソンは自説を事実上撤回したとされる。同書は、ベルクソン時間論の重要著作でありながら、かかる経緯から不幸にも今日評価の難しい著作となってしまった。ではあるものの、同書を形而上学の論考としてみたとき、そこには時間と存在といった中心的テーマに関する深い洞察があり、したがって同書は未だに重要な著作であり続けているように思われる。本稿では、ベルクソンの時間の唯一性のテーゼに焦点を当ててその問題点を検討するとともに、このテーゼの直観的な妥当性をいかにして正当化するかについて論じる。

議論は以下のように進む。はじめに、ベルクソンによる時間の唯一性の論証を分析する（1)。次に、これを可能とする持続の綜合というアイディアのなかに問題を見出し（2)、その問題を正確に再構成する（3)。そのうえで、ジェイムズの議論を参照しつつ問題解決の道を探り（4)、具体的かつ適切な、ひとつの可能な解決策を提示する（5)。

1. 時間の唯一性

ベルクソンは、『持続と同時性』において、自身の時間論である純粋持続説の立場からアインシュタインの相対性理論を批判した。その際に重要な

本学現代教養学部准教授

論拠とされたのが、時間は唯一であるという持続一元論の立場である。これは、物理学的主張というよりは形而上学的主張であり、その含意は未だに検討され尽くしてはいないであろう。その問題点がどこにあるのかを明らかにするためにも、まずはこの主張を分析することから考察を始めよう。

ベルクソンの主張でとりわけ問題となるのは同書第三章「時間の本性」の所論である[i]。そこで提示される時間の唯一性あるいは持続の一元論とは、ごく簡単に要約してしまうと、意識の持続を周囲に拡大し、宇宙全体を持続するものとみなすことができる、というものである。だが、この主張を導く論証は、ベルクソン自身の以前の思想への反省なども含むやや複雑なものであり、慎重を期すためにもその過程を多少詳しくみておきたい。論証全体は、意識の時間から物の時間へと論じる部分と、物の時間が唯一であることを示す部分の二つに大別できる。

1．1．意識の時間から物の時間へ

はじめに、意識の内的時間から物の時間への移行が可能であることを示す論証を検討しよう。具体的には、ベルクソンは意識から出発し、周囲が一様に持続することを論証する。そこで、議論は次のような主張から始まる。

1　　意識が持続する。

これは内的時間であり、事実としてよい。ここから一歩踏み出す。

21　　身体と周囲の物質が持続する。

ここには事実が含まれているが、仮定もある。これは以下のように分析できる。

211　身体が持続する。

212　周囲の物質が持続する。

212 は事実ではない。外的事物の意識への参与という仮定が含まれるが、物質は持続しないかもしれない。これについてはベルクソン自身が『意識の直接与件についての試論』における論証を参照している[ii]。そこで、周囲＝身体あるいは周囲の物質、とする。そうすると、21 は次のように改められる。

22　周囲が持続する。

このように修正したうえでならばこれは事実として認められてよいが、持続のしかたに問題がある。論理的な観点からみて、次の二つの可能性がある。

221　周囲が一様に持続する。
222　周囲が多様に持続する。

このうち 222 の可能性を考える。具体的には二つあり、実質的にいずれかである。

2221 「種々のリズムをもった持続」がある。
2222　生物の意識の程度に応じた持続がある。

2221 は『物質と記憶』で示されたことであるが、ベルクソンはそのための明確な根拠をみつけられない[iii]。2222 に対しては、すべての生命に共通した飛躍がある、という『創造的進化』における議論があり、世界を分割する必要はない[iv]。そうすると、222 を導くことはできない。そこで最終的には 221 という結論に至る。要するに、持続が複数ありうるという持続の多元

論の可能性を検討したが、それは斥けられ、一元論が導かれたのである。そこで物質的宇宙が唯一持続するという、持続一元論を仮説として採用する（ドゥルーズが示したように、ここで 221 は持続一元論、222 は持続多元論であり、2221 と 2222 は 222 の主要なヴァリアントである）[v]。

1．2．時間の唯一性

ここまで一様な持続の存在が示されたので、議論は実質的には終わっているが、さらに 221 を補強しつつ、宇宙全体が持続するという結論をめざした考察が展開される。

31　人間のすべての意識は同一で、同一歩調を取り、同じ持続を生きる。

言いかえると、意識は同一のリズムをもっている、ということであろう。宇宙中に散在する意識のなかから適当な二つを選ぶ。

32　それぞれの経験が外縁を共有する、つまり接触することが可能である。

この系として、このような経験は共通部分をもつ、ということが言える（点を部分とみなしてよいのであれば）。また、31 から次が言える。

33　これらの経験は同一のリズムをもっている。

さらに、32 より、次が言える。

34　これらの経験はそれぞれの意識のどちらか一方の持続のなかの経験と合一する。

物質界全体の出来事を同様にして寄せ集め、そのうえで中継者としての人間的意識を除去すると、非個人的意識が残る。かくして次が言える。

35　宇宙全体が持続する。

以上が時間の唯一性、持続の一元論を導く論証である。

1．3．論証の検討

ベルクソンは議論を慎重に進めているが、その到達点はいわゆる独断論の一歩手前であって、巧妙な誘導をかけられた印象がなくはない。なぜ彼はこのような危険を敢えて冒したのか。主張のおかれている文脈をまず確認しておこう。

ベルクソンが見るところ、相対性理論では時間が複数あることになる。例えば、相対論の帰結のひとつとして、運動した者の時間は、残って静止していた者の時間に対して遅れ、その結果両者の時刻が合わなくなるという現象が起こる（いわゆるウラシマ効果）。これは、それぞれが異なる持続を生きてきたことを意味すると解釈せざるを得ない。しかも、時刻の不一致は、空間と時間を並置してひとつの四次元連続体を構成するとしたうえで、そのなかで行われる変換によって説明可能であるが、ベルクソンにとって、これは時間の空間化という、到底看過しえぬ形而上学的誤謬である。それゆえ、ベルクソンは、自らの純粋持続の説は相対性理論と矛盾するものではないとしつつも、時間の唯一性を主張し、一方の時間が実在的ならば、他方の時間は想像の時間、虚構の時間である、とするのである。しかし、ベルクソンの言い分に反して、時間の唯一性は相対論と矛盾するのであり、この点で物理学者からの反論を招いた[vi]。

このように、ベルクソンには持続の一元論を採用したい切実な理由があった。しかし、そのための議論は上でみたように高度に思弁的であり、直観的な経験を超出した内容を含んでいる。すると、ここで湧き上がる疑問は、持

続の唯一性というこのテーゼには、相対論との矛盾はさておいても、哲学的にみて問題はないのか、というものではなかろうか。上述の論証は相対性理論とは直接には無関係であるが、これが形而上学的な問題を生み出す恐れは本当に皆無であろうか。言うまでもなく、いつものベルクソンは直観を重視し、存在論的思弁に対しては禁欲的な姿勢を崩さないが、この問題に関しては敢然とリスクをとったようにみえる。

2. 持続の綜合

持続一元論が言えるためには、持続とはなにか、それらについてはどのようなことが起こるのかについていっそう詳しい規定が必要であろう。それは、以下のような同時性概念の再検討の場面で、持続の綜合の可能性というかたちで与えられているように思われるが、しかしこれは同時に、時間の唯一性の形而上学的問題が明確にその姿を現す場面でもある。この議論を検討してみよう。

同時性は、持続や継起と並ぶ時間の基本的様態のひとつであるが、ベルクソンはそれを再検討し、少なくとも「瞬間の同時性」と「流れの同時性」が区別されるべきである、とする[vii]。ベルクソンとしては、同時性が流れの同時性として解釈されうる可能性を示すことにより、持続が綜合されることを認めて、先述の時間の多様性という帰結を避けたいのであるが、では、そこでは何が論じられるのであろうか。ベルクソンの記述をみてみよう。

流れというのはひとつの厚みをもった経験であるが、その例として、川べりで憩うときの水の流れ、船の滑走あるいは鳥の飛翔、深い生命の不断のざわめき、といったものが思い浮かぶ。これらは三つのものでありうるが、ひとつのものでもありうる。さらに、先の二つは外的なもの、後のひとつは内的なもの、とすることもできる。これらは別々のものでありうるが、自分の知覚に関連づけて、ひとつにすることもできるし、その内訳を自由に定めることもできるのである（とはいえ、三つのものを、周囲の環境とその中を自由に運動するもの、およびそれに対する意識作用ととらえるのは自然であろ

う)。

このような融通無碍な性格をもつ持続について、一般に次のようなことが言える。二つの外的な流れが同時的となるのは、それらがわれわれの流れである第三の流れの持続の中にともに入って同じ持続を占めるからである[viii]。問題はこの第三の流れである。これをどのように解するべきか。二つの持続が同時的であるためには、それらがいずれとも異なる第三の流れに綜合される必要がある、という原理がここで要請されているのであろうか。

ベルクソンは、いくつかの持続が絡まり合うようにしてひとつの持続が形成される場面をこのように記述し、いわば持続の綜合の可能性を提示したが、いかにも自然なこうした記述には何らの問題もないのかと言えば、そうではない。この記述を支える主張からは、以下にみるように、無限後退が導出されるのであり、それは、(後述するように)論敵であるはずのブラッドリの内的関係説を彷彿とさせる。いわゆるブラッドリの関係のパラドックスである。この持続の綜合の可能性の主張は、持続一元論を補強する材料であるはずである。ということは、持続一元論は、その土台をブラッドリのパラドックスによって脅かされているのではないか。

3. パラドックスの再構成

これまでの考察を踏まえて、持続の綜合の可能性が実際にパラドックスを導くことを示してみよう。

議論の出発点として、同時的な持続がある。それらを持続 D_1 と持続 D_2 としよう。ここにはまだ問題はない。問題は、これらが同時的であるならば、これらを包括する持続がある、という主張ないし要請である。そこで、このような持続を D_3 とする。ところで、ある持続 D_i を包括する持続 D_j は、D_i と同時的である。したがって、ここで提示された D_1、D_2、D_3 は同時的である。すると、これらを包括する新たな持続 D_4 が存在することになる。このような、与えられた持続をさらに包括するような持続を生成する過程は、明らかにいくらでも繰り返すことができるであろう。それゆえ、無限に多く

の持続が生成される。

この議論に対しては次のような疑問が浮かぶかもしれない。すなわち、パラドックスは、二つの持続を包摂するような持続を考えたからこそ生じたのではないか。もしそうであるとすれば、自分が他のもうひとつの持続と対峙しているような場合にはこのようなことは起こらない、という希望が持てるのではないか。たとえば、鳥の飛翔と、それを無心に眺める自らの内的な意識の流れ、という場面ではどうであろうか。これらの持続の同時性は無媒介的に意識され、したがって二つの持続は直接に交じり合い、余計なものが生成されることはないのではないか。

しかしながら、たとえこうした場合であっても危機を脱することは難しいように思われる。持続 D_1 と持続 D_2 の融合とは、実は D_2 による D_1 の包括であり、しかもそのときに起きていることは、D_2 を外から眺める持続による包括なのではないか、と考えられるからである。つまり、D_2 を内的な流れであると意識するような、より内的な意識の流れがあるのではないか。これはもはや D_2 ではなく、新しい D_3 であり、結局 D_1 と D_2 は D_3 に包括される。だが、このような議論が可能であるならば、さらにこれらを包括する新たな持続の生成も可能でなければ不合理であろう。かくして、この場合もまた無限後退に陥るのである。

さらにもうひとつの難点を指摘しておこう。まず、唯一の持続があるとする。だが、上述の原理により、それを包括する持続がある。すると、先のパラドックスを論じた際に登場した原理によって、それらを包括する持続もあるであろう。このような考察を続けると明らかに無限後退となる。すなわち、唯一の持続が存在するという仮定から、無限に多くの持続が存在することになるのである。

このパラドックスはあまりにも奇妙で、あまりにもエレア派的にみえるかもしれない。ゼノンは一元論を確立するために、よく知られた四つのパラドックス以外にも、多が無限小であると同時に無限大でもある、というパラドックスを提示したが、このパラドックスはその鏡像に見えないこともな

い。持続はそもそも部分をもちうるものであるが、そのような持続が唯一のものであるためにはそれが無限に小さなものでなければならず、その一方で、上述のように、より包括的な全体として無限に大きなものでなければならない。これは矛盾である。このようなパラドックスの出現は、持続という概念にある種の危険性が内蔵されていることを警告しているようでもある。

もっとも、ベルクソンには、このような弁証法的議論に対する予防策を講じていた形跡がある。具体的には、意識の綜合がなされても、数が増えないように周到に細工を施しているようにみえるのである。

ベルクソンは、われわれの意識のなかの注意作用には、「分割されることなく分配される」ことが可能であり、「一であるとともに多でもある」という特性があるという[ix]。さらに、はじめの持続一元論の導出にあたっても、いま改めて議論を振り返ってみると、二つの経験は、「この二つの意識のなかのいずれかの持続」に属するとしていた[x]。その心は、直接の融合が可能である、ということであろう。この場合の持続の綜合は、むしろ持続の吸収という趣を強くする。そうであるとすると、これでは持続の数が増えないから、パラドックスを導くことはできない。

しかし、一にして多という原則は、持続の数を増やさないという方針と両立可能であろうが、他方で、この原則は数を増やすという方針とも両立可能であり、どちらか一方だけを選択するアプリオリな理由は存在しない。

また、意識がその主体だけに注目するとき、その持続は主体の持続でしかないが、三つの流れを一つの作用に包含するとき、それは三つのものの持続になる、と述べているが[xi]、三つのものはそれぞれ異なっているのだから、これらの持続を包括する持続がある、と考えるほかないのではないか。

こうした一連の議論がブラッドリの内的関係説によるパラドックスを想起させるものであることは明らかであろう[xii]。ブラッドリのパラドックスとは次のようなものであった。すなわち、二つの関係項を結びつける関係は、それ自体と関係項を結びつける何らかの関係を必要とする。すると、ここで改めてこれらを結びつける関係が必要となり、かくして無限後退に陥るのであ

る。

ところで、すでに論じたように、ブラッドリのパラドックスは、ゼノンのパラドックスのいわば鏡像である[xiii]。前者が複数のものを綜合して全体とする際に生じるのに対して、後者はある全体を分析（分割）する際に生じる。あるものの分析が生じるためには、そのものと分析する行為が分析されていなければならないが、もしそうであるとするなら、ここでいくらでも事前の分析が要請され、無限後退に陥るであろう。このパラドックスの一般構造はアキレウスのパラドックスなどとも共通するものであろう。

こうして、ベルクソンの持続の綜合可能性の議論は、ブラッドリのパラドックスを排除できないのであるが、そうであるとするならば、同時にその鏡像としてのゼノンのパラドックスも排除できないのではなかろうか。するとどうであろうか。ベルクソンはいつのまにかゼノンのパラドックスに接近していることになってしまわないであろうか。

言うまでもなく、ベルクソンはゼノンのパラドックスを一貫して批判し、自己の持続論の基礎とした。『意識の直接与件についての試論』では、エレア派は、持続を軌跡と同一視し、空間と同様に時間も分割可能であるとしたことによってパラドックスに陥ったとした。ここから、空間を計測することはできるが「持続を計測することはできない」という主張が導かれる。また、『物質と記憶』では、持続とその軌跡を同一視することにより、軌跡における点に対応するものとしての瞬間の存在が主張されるが、これこそがゼノンのパラドックスの原因であるとして、瞬間は存在しない、とする。『創造的進化』においては、ゼノンのパラドックスは、形而上学がすでにその起源において時間の空間化という過ちを犯していることの証拠として指摘される（形而上学的原罪）[xiv]。

かような次第であるから、ベルクソンはエレア派的議論に訴えることはできない。それゆえ、ここでのベルクソンの議論は、相対性理論との整合性という問題以前に、その形而上学的な根拠の妥当性という問題を抱えている。

4. ベルクソン、ブラッドリ、ジェイムズ

以上でみてきたように、ベルクソンによる持続一元論の導出過程はブラッドリの内的関係説に加担しているようにみえるが、もしそうであるならば、それは由々しい事態であって、黙過することはできないであろう。いかにしてこの窮地からベルクソンの哲学を救い出すことができるであろうか。

実は、ベルクソンとブラッドリの思想が、最終的には相容れないものではあるものの、いくらかの共通点をもっているという微妙な関係にあることが、すでに指摘されている。とくに重要なのは、ウィリアム・ジェイムズの論文「ブラッドリか、ベルクソンか？」における比較研究である[xv]。この示唆に富んだ重要な論考を手がかりに、形而上学的混合物のなかに溶け込んでいるベルクソンの思想成分とブラッドリのそれを分離することを試みてみよう。

ジェイムズの観察によれば、ブラッドリとベルクソンには共通点がある。それは、両者がともに観念論に反対する、という点である。ここでいう観念論とは、カントの批判哲学のことである。超越論哲学においては、所与は多様であり、連続性を欠いている。そうした感性的所与に対する直観形式の適用と統覚の悟性的な操作、すなわち綜合により、経験の連続性が回復されるのである。

このような観念論の立場に対して、ブラッドリとベルクソンは、ともに経験がすでにそれ自体として連続的であり、知性の作用ないし機能は、そのような所与としての経験を分析することである、と考えている。

しかし共通なのはここまでで、両者には明確な違いがある。ブラッドリによれば、真理は理論的に把握されるものであり、形而上学の対象であって、非知性的・生活的態度において実践的には把握されるものではない。それに対して、ベルクソンにとっては、知覚こそが完全な認識であって、生命は直観によって把握されなければならないのである。

この違いが両者の哲学を全く異なった色に染め上げてゆく。ブラッドリは

絶対者を志向し、一元論をとるが、ベルクソンは経験の一体性を認めながらも、多元論をとる。そればかりではなく、ブラッドリが真なる存在者として普遍者を求めるのに対して、ベルクソンは存在を、個別者を手引きにして考えることをやめない。両者の存在論はいたるところで鮮やかなコントラストを強めてゆくのである。

以上のジェイムズの批評は、ベルクソンの持続の理論には触れていない。しかし、彼の分析は、ブラッドリとベルクソンのそれぞれの哲学の基本的な性格の違いを言い当てているように思われる。その洞察の光で、ベルクソンの持続の一元論を非ブラッドリ的な形而上学としてとらえなおす可能性を照らし出すことはできないであろうか。

アインシュタインの相対性理論はあくまでも物理学の理論であり、そこには形而上学的な概念である唯一の時間が登場する余地ははじめからない。他方で、ブラッドリの形而上学においてはどうであろうか。そもそもブラッドリにとって時間は矛盾を含んでいるから、非実在的なものにすぎない[xvi]。それゆえ時間について考える必要が最初からないのかもしれない。しかし、敢えて時間というものを考えてよいのであれば、真の時間は非人格的な、絶対者の時間である、ということになるのではないか。

このような時間論のヴァリエーションが用意されたとして、ベルクソンの時間論はどれにあたるであろうか。それは、時間の唯一性というテーゼを含んではいるが、同時に絶対者からは可能なかぎり距離をとろうとするであろう。そして、時間はあくまでも実在的であり、本来は事実としての多様な持続のなかに感じられるものであると主張するであろう。

このように考えてくると、ベルクソンの時間は、所与としての多様という姿においてはアインシュタインが論じた物の時間と隔たるところはなく、他方で唯一の持続という姿においては、実は実在性が欠けているのではないか、と思われてくる。このようなものであると考えれば、ベルクソン自身が言う通り、その持続は相対論と両立しうるであろう。相対論との矛盾は、ベルクソンの唯一の時間を、ブラッドリの形而上学のひとつの可能な解釈とし

ての絶対者の時間と誤解することによって生じるのではないか。先にみたように、ベルクソンの議論のなかにはブラッドリのパラドックスを連想させるものがあり、このような誤解は惹き起こされるべくして惹き起こされたのかもしれない。しかしながら、ブラッドリのパラドックスはエレア派の弁証法と同様に退けられるべきものであり、したがってこれをベルクソンの哲学のなかに認めることはできない。それゆえ本当はいかなるパラドックスも生じてはおらず、唯一の持続はいわばひとつの理念にも等しい、潜在性にすぎない、と考えるべきなのではないか[xvii]。

5. 実在性の指標性：持続の内と外

かくしてベルクソンの形而上学のなかの見かけの矛盾は解消されたのであるが、気になるのは、ベルクソンの直観をどこまで救い上げることができるか、である。ブラッドリの形而上学から距離をとろうとすると、持続は多様であらざるをえず、これはもちろん相対論と整合的であるが、しかし、持続は唯一であるという主張とは明らかに整合しない。

では、ベルクソンの持続の唯一性という主張は完全に放棄されるべきであろうか。そのような立場から持続の存在論を構築しなおすことは可能かもしれない。『物質と記憶』で展開されたような存在論こそが本来あるべきもので、時間の唯一性の主張は不要である、という解釈を打ち出すことは不可能ではないであろう。

しかし、時間の唯一性という主張のうちに込められた直観的な含意は、そのすべてが打ち捨てられるのがためらわれるような形而上学的生命を帯びているようにも思える。たしかにひとつの意識主体が広大な宇宙の隅々にまで眼差しを注ぐことは不可能なのであるが、だからといって、それが他人の持続を実在的なものとして生きなければならないわけではないであろう。宇宙をみることと持続を生きることのあいだには本来関係はなかったはずなのである。時間の唯一性という主張を、すべてをみることとして解釈せねばならない理由はないし、他人の持続を生きることとして引き受けなければならな

い理由もまたないであろう。ここには実在性という概念をめぐる混乱があるように思われる。

この混乱は、関連する概念を再考することによって収拾することができるかもしれない。ひとつの可能性に過ぎないかもしれないが、次のような考えにはそれなりの意味があるのではないであろうか。つまり、ただひとつの持続のみ存在するという存在論的事態を認めることはできないが、それでも、さまざまな持続が存在するなかで、そのなかのひとつだけが実在的なものとみなされるに値する、という考えである。

そのためには、「実在的な持続」とはどういうものかを再考することになるであろう。すると、ここで想起したいのは、実在性は指標的である、ということである。つまり、実在性は見方によって変わる。一般論として、A の持続 D_A は、A にとっては実在的だが、A とは異なる B からみれば非実在的である。同様に、B の持続 D_B は、B からみれば実在的だが、A からみれば非実在的である。このように、持続が実在的であるかどうかは、その持続をどの観点からみるかに依存するのである。

そうすると注意が必要なのは、上述の「観点」の解釈であり、まさにここに多義性がある。ひとつの観点は、持続の主体の観点である。これは、当の持続を生きる者の観点であるとも言える。それとは明確に区別されるべきもうひとつの重要な観点は、持続を眺める者の観点である。この観点に立つ者は、当の持続を生きてはいないが、それに並走するように、あるいは寄り添うように生きている。前者は間違いなく当の持続を経験しているが、後者もまたその持続を経験しているとは言えるであろう。

持続の主体の観点を「内的な」観点、持続を眺める者の観点を「外的な」観点と呼ぶこととしよう。これらの観点の違いは、持続の実在性という概念の解釈にどのような差異をもたらすのであろうか。

議論のために、いま、二つの持続 D_1 と D_2 を用意しよう。その内容はここではどうでもよいのだが、ベルクソンが挙げるような、ある地点にいるポールの意識と、運動しているピエールの意識、としておいてもよいであろ

う。さてこのとき、彼らにとって実在的な持続とはいかなるものなのであろうか。観点のとりかたによって、この問いへの答えとして提示されうる物語は、以下のように、少なくとも二通りが可能であろう。

第一の物語はこうである。いま、D_1 を生きる者にとって、D_1 からみて実在的なのは D_1 だが、D_2 からみて実在的なのは D_2 である。さらにまた、D_2 を生きる者からみても同様で、D_1 からみて実在的なのは D_1 だが、D_2 からみて実在的なのは D_2 である。

これに対して、次のような第二の物語も可能であろう。D_1 を生きる者にとっては、D_1 からみて実在的なのはもちろん D_1 だが、D_2 からみて実在的なのも D_1 である。それに対して、D_2 を生きる者にとっては、D_2 からみて実在的なのはもちろん D_2 だが、D_1 からみて実在的なのも D_2 である。

これらの物語の違いは、下のような表を作成することによって明確にすることができる。縦軸に内的な観点をとり、横軸に外的な観点をとる。これらはそれぞれ異なる観点であるから、両者を共に考慮して持続の実在性を判断することが可能である。たとえば、持続 D_1 を生きる者が同時に D_1 を眺めるときと、そうではなく D_2 を眺めるときには、何らかの差異がある可能性がある。それは、下の表の（1, 1）と（1, 2）の違いとして現れる。

【表 5.1　物語の観点の組み合わせ】

外的 ＼ 内的	D_1	D_2
D_1	(1, 1)	(1, 2)
D_2	(2, 1)	(2, 2)

二つの観点が組み合わせられたとき、どちらの持続が実在的であるとみなされることになるのかを、この表のなかに記入してゆくこととしよう。上述の第一の物語の場合、この表は次のようになるであろう。

【表 5.2　第一の物語の表】

外的 ＼ 内的	D_1	D_2
D_1	D_1	D_2
D_2	D_1	D_2

これに対して、第二の物語の場合は、この表は次のように完成されるであろう。

【表 5.3　第二の物語の表】

外的 ＼ 内的	D_1	D_2
D_1	D_1	D_1
D_2	D_2	D_2

観点のとりかたによって、どの持続を実在とみなすかが推移しうるということ、観点の区別が実在性の概念を動揺させうるということは、これらの表の違いから明瞭に読み取ることができる。

第一の物語では、持続の実在性は、それを生きる者が誰であるかによっては決まらない。それを眺める者が誰であるか、によって決まる。このような観点からみられた持続は、生の事実から遊離しており、いわば想像された持続である。この意味での持続はもはや持続そのものではなく、概念としてのそれであると言えよう。

第二の物語における持続は、それとは異なり、あくまでもそれを生きる者の観点を貫き通すことで得られるものである。この場合の持続は、持続そのもののことであると言える。

ここで、先にベルクソンが相対性理論を批判したときの論点を思い返して

みよう。彼の念頭にあったのは、相対性理論は、持続を第一の物語のようにとらえることを強いる、ということではなかったであろうか。それは、各自がそれぞれの持続を生きながら他の持続を想像している、といった状況を描写しているようにも思われる。実在的な持続と自らが生きる持続とが一致していないのである。

このように、どの持続を生きているのかを問わず、いわば持続概念を表しているような観点においては、以下が必然的になる。

持続＝想像された持続

この必然性は、それを眺めるときにどのように見えるのかという認識論的な次元での必然性であり、したがっていわゆるアプリオリである。

しかし、第二の物語におけるような実在性を考えることが可能なのである。ここでは、持続とは具体的な持続であり、どの持続からみても同一である。この意味では、持続は唯一と言えよう。そのような場合、以下は必然的となる。

持続＝生きられた持続

実在はそれを眺める立場とは無関係に、それを生きるという根源的な事実によって規定される。ここでの持続は概念ではなく、持続そのものであると考えるべきであろう。それゆえ、ここでなりたつはずの必然性は、存在論的な次元での必然性であり、形而上学的必然性である。

この第二の物語の持続のとらえかたから、第一の物語の持続のとらえかたを構成する方法がある。それは、持続の主体の観点（内的観点）と持続を眺める者の観点（外的観点）が一致する場合を選んで作られる観点の組の系列を、各持続の主体の、外的な観点ごとの差異の系列として採用する、という方法である。具体的には、下記の表において斜体で表現したところを順に選

ぶのであるが、要するに対角線に沿って選ぶのである。

【表 5.4　第二の物語から第一の物語へ】

外的 ＼ 内的	D_1	D_2
D_1	$\boldsymbol{D_1}$	D_1
D_2	D_2	$\boldsymbol{D_2}$

第二の物語からそのようにして選ばれた観点の組の系列（D_1、D_2 と続く系列）が、第一の物語の事態のとらえかたと一致することは明らかであろう。

以上の議論から明らかなように、第二の物語のとらえかたにより、持続の多様性の立場を維持したまま、持続の唯一性を主張できる。持続の実在性は他の持続に相対化されることはない。その持続は、他の持続からみても実在的でありつづける。このような実在性は、それをどのようにみるのかという外的な観点から独立なものであって、それゆえ認識論的な問題とはならない。

このような観点の違いを用いた議論は、言うまでもなく現代の言語哲学における二次元意味論の応用に過ぎない。しかしながら、この精緻な理論的装備によって、ベルクソンと物理学者たちの論争を別な角度から眺め、両者の議論の陰に隠れがちな哲学的問題に光を当てることができるようになる。持続や実在性といった基本概念の含意を十分に明らかにするという概念分析の作業をすすめながら、同時にベルクソン哲学の理論的貢献を明らかにすることもできるのである。

6. おわりに

本稿では、ベルクソンの持続一元論の帰結を追究してきた。このテーゼの問題性が祟って『持続と同時性』はベルクソン研究の躓きの石となってきたが、唯一の持続を潜在性とみることでブラッドリのパラドックスのような形

而上学的帰結は回避されうること、そうすると多元論をとることになるが、しかし実在性概念の指標性を考慮することで、時間の唯一性というテーゼを無意味なものとせずに済むことを示した。『持続と同時性』に関連する問題が物理学と形而上学の関係の問題には限らない、ということは一応示すことができたのではないか。

ブラッドリを含む観念論が後発の実在論によって乗り越えられてゆく過程は、たしかに現代哲学の基礎のなかに影響を与えている。今回は、ベルクソンの思想をそうした文脈の中で分析することができた。また、ベルクソンの哲学を現代の様相の形而上学の土俵に上げることも試みた。以上の結果を踏まえて、形而上学のこれからについて、一層研究を進めてゆきたい。

謝辞

本稿は JSPS 科研費 JP20K0015 の助成を受けたものである。

〔注〕

[i] ベルクソンの著作への参照は略号で示す。それに続く数字は原書頁番号。それに続く括弧内の数字は邦訳頁番号。DS, 42-4 (201-3)

[ii] DI, 80-4 (103-7). 運動は計測されないことを示す論証において。

[iii] MM, 232f. (231f.)

[iv] EC, 15 (34)

[v] Deleuze (1966: ch.4)

[vi] 本稿では相対論の問題に深入りしない。渡辺 (1974: Ch. XI) などをみよ。

[vii] DS, 50 (210)

[viii] DS, 51 (211)

[ix] DS, 50f. (210f.)

[x] DS, 44 (203)

[xi] DS, 51 (211)

[xii] During (2013: 159) では、異なる観点からではあるが、ベルクソンの議論に注意を促している。

[xiii] 齋藤 (2021)

[xiv] DI, 84-6 (107-9), MM, 211-3, 212-4 (213-5, 214-5), EC, 309-12 (348-52). DS ではエレ

ア派批判は影を潜めている。

[xv] James (1910). Madelrieux (2011) にはその仏訳と現代の研究論文が収められており、今日再び注目を集めていることをうかがわせる。また、Levine (2004) はブラッドリとベルクソン、ジェイムズを含む思想的文脈に触れている。

[xvi] ブラッドリの時間論はいっそう入念な検討に値する。遺憾ながら本稿では立ち入らない。Cf. Sprigge (1993: Part. 2, Ch. 4, §3)

[xvii] Turetzky (1998: Ch. XIII)

文　献

［非邦語］

Bergson, H., 1889/1927, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, PUF（平井訳，1965,『時間と自由・アリストテレスの場所論（ベルグソン全集 1)』，白水社）（略号 DI）

――，1896/1939, *Matière et mèmoire*, PUF（田島訳，1965,『物質と記憶（ベルグソン全集 2)』，白水社）（略号 MM）

――，1907/1941, *L'évolution créatrice*, PUF（松浪・高橋訳，1966,『創造的進化（ベルグソン全集 4)』，白水社）（略号 EC）

――，1922/1968, *Durée et simultanéité*, PUF（鈴木ほか訳，1965,『笑い・持続と同時性（ベルグソン全集 3)』，白水社）（略号 DS）

Deleuze, G., 1966, *Le bergsonisme*, PUF（宇波訳，1974,『ベルクソンの哲学』，法政大学出版局）

During, É., 2013, 'Temps kaléidoscopique et temps universel: la cosmologie bergsonienne à l'épreuve de la relativité' in Worms, F., & C. Riquier (ed.), 2013, *Lire Bergson*, PUF, 139–162

James, W., 1910, 'Bradley or Bergson?', *The Journal of Philosophy Psychology and Scientific Methods*, Vol. VII., No. 2, 29–33

Levine, J., 2004, 'The What and The That: Theories of Singular Thought in Bradley, Russell, and the Early Wittgenstein', in Stock, G. (ed.), 2004, *Appearance versus Reality: New Essays on the Philosophy of F. H. Bradley*, Oxford: Clarendon, 19–72

Madelrieux, S. (ed.), 2011, *Bergson et James: Cent Ans Après*, PUF

Sprigge, T., 1993, *James & Bradley: American Truth and British Reality*, Chicago: Open Court

Turetzky, P., 1998, *Time*, New York: Routledge

［邦語］
齋藤暢人，2021,「内的関係説の形而上学的含意」『中央学院大学現代教養論叢』3(1)，1-27
渡辺慧，1974,『時』河出書房新社

On the Plurality of Durations

SAITO Nobuto

ABSTRACT

In *Durée et Simultanéité*, Bergson criticized Einstein's theory of relativity from the standpoint of his philosophy of time. However, his theory led to criticism from physicists, and Bergson allegedly withdrew his theory. Although this book is an important work of Bergson's philosophy of time, unfortunately it has become a difficult work to evaluate today due to such circumstances. However, when viewed as a metaphysical writing, it is full of deep insights into the central subjects such as time and existence, and therefore the book seems to remain an important work. In this paper, I will focus on Bergson's thesis of the uniqueness of time, examine its problems, and discuss how to justify the intuitive validity of this thesis.

The discussion proceeds as follows. First, we analyze Bergson's argument for the uniqueness of time (1). Next, we find a problem in the idea of integration of durations that makes possible this thesis (2) and reconstruct the problem accurately (3). Then, referring to James's discussion, we will search ways to overcome difficulties (4) and present one possible solution that is both concrete and adequate (5).